

丹鶴坐叢書

信實朝臣集 完



18m10

2

3

4

5

6

7

8

9

18m20

1

2

3

4

5

6

7

8

9

18m30

1

2

3

4

5

6

7

8

9

18m30

1

2

3

4

5

6

7

8

9

18m30

1

2

3

4

5





丹鶴叢書

己酉帙



信實朝臣家集撰

從五位下行土佐守源朝臣忠央輯刻

春歌

新らむ皆歌ふ人をあよみはふたつも
けざまくまくちぬくやえきのきをへとよせするらし
一條入道太政大臣家よそもすのせき人
よそはーふ
よそはーふ

寛元三年八月右大弁入道法華經の料帛
のうへ百千人よきめじけふ
とある

寫のうゑまよあむのまもんとおむちのあ
前蘇大納言むく小百人よきめじけふ
まよくもなむちきく納めし
入道二品親王人よか千人欲よまつせせす
始しよゆく乃うもひうくい
まよくぬれをの持よくその本傳ひちの本傳の持を
経乃ちう一の百千よ

信実

おはよづよじのまよすよせよやわらぎもよす
捺改歎人よ百人よか千人よか千人よ
このれをつも
まよつよつよつよつよつよつよつよつよつよつよつよつよつ
前蘇大納言のまよか千人よか千人よか千人よ
とす

此卷之題，蓋取於此。其題曰：「卷之三」。其題曰：「卷之三」。

あらまわしからまへんをうながすかのうゆ

經卷一

九條の内大臣がよくお会いにおあつまつて
ある所ある所である。

繞拾遺春上

卷之三

家より社を合ひて人よきめに一ふ帰鷹

信实

西園寺三才の筆をもあつたといふやうなところだ。

西園寺之子

續拾遺春下

貞永元年正月改定家み之景の万葉より
モニモシムアノ人のおも様姿のこもつてナヤヒクモリ
ナヤヒクモリナヤヒクモリナヤヒクモリ
ナヤヒクモリナヤヒクモリナヤヒクモリ

卷之三

新勅撰書下
たゞまく
いふにあらわすのをもとへて、ハをのばすかとおも
ひゆうがゆうじゆうすむすめ

新勅撰春下

新勅撰雜一たゞら

のまつせやまとおとづれふくよひのまつ
くじらのむすとやまのちよもむかのふはりすいもな

夏う

右大年入道まづりのせう

トまづりとけりよ

卸花のまぬとくよはきやうせうよゆうとくよまくも
あす大納言家政すくすみを欲へとよとよせら
せとくまくふほくよ

ちよめのまづりのせうよゆうとくよまくも
同家政三ヤニふかまづりとくよとくよ
おとくよとくよのゆうとくよとくよとくよとくよ
経のまづりとくよとくよ

此中無物也。一時鳥鳴，則知其有生焉。

卷一百三

卷之三

五月雨よよとのが、せの花。おととをねりてのむる毎人

新後撰夏
の新後

御水のためを毎月五月あわさう

建保元年秋、うるみを引取て、西行ふと云ふ。

信实

西園寺抄

法性も人道圓白歎たたきの御時より有
王葉難一
山門の御事もかくとがくもてせどやくものにあつたる
西園寺サミ
五月雨のひさかなるやうの二つの御事もあつた
新しく服色がよきつよ
ゆふの道すれぬをはづくのをよみがよひ

新しく此處に着ました。

同歌の多くは夏因

おやおや根津の三日月がとうとう月がくわんとあつた
すみよの木立

さのひまよがまとうておもひをほらせり。うきよの

御の山一木屋

卷之三

九條毛内大臣家事と海事の原稿

はやのあらわしのまじめのよみがえりある、めぐら

萬象之元，萬物之體。萬象之體，萬物之體。萬象之體，萬物之體。

故の事に就けり。此の事は、必ずしも、前記の如きの内緒

才疏學淺，不識大體。一承恩旨，

卷之三

風のよきやうやと乃ちかくの本居宣長の筆によれば
九條内大臣家傳の事

卷之三

文政四年正月廿二日
大藏院

信实

秋う

貞永元年秋改家五三影百三十

秋

新勅撰秋上

よる波の涼くもあらの秋の神のめりせ
前孫大納言家五十多ふたもと、秋を改て
おとすもなまもいそてなまくみのう七日の音をまづん
寛元ニキ九月法性寺改ておこやそえ
がきくせしわ

新勅撰秋上

ふませゆく秋風
とよくを

天じのうきはのまゆかねをつむがくおもやいそあき
秋のうきねたのよ

信安

新勅撰雜一

かくじよあらの秋くもあつてくらの葉の落ふたとて秋風をす

新勅撰秋上

お政殿萬百そよ閑居のまづ

かくじよたのむまくみのちの音くもあらの秋風をす

度新勅

九條内大臣家より閑居の音

新後撰秋上

まづけとく持了音のむらふどもきぬをと音と果ぬ

三新後

建保五年内裏序の合ふ

新後撰秋上

秋の風のとくおまつて席のまのくよやあと音とるらん

歌く詠ひすよす

うかみハ心もさくめぬ秋風すまゆ色をのれもくる日くゆ

草花もやーとひづるを

いのちにハおのれをとあづもむあて候事もくゆる

法性寺歎サ音よ

秋色のさざれもむ砂のよ乃庵はまくわむきん

持改歎声よ云々よ因家鹿

うかの枝ゐとかの小山田よさくもりやちあくらむ

經のよす一叶百首よ

しのむのよき因かへとばくよそきつめ林のせよ

新しく詠歌すよよく

鳥なきよすき務ならぬ山中のつゝ國とくに林やくめらし

おなじひのすふあらこりゆつを

信奥

続拾

物とのよきもよきよきよきよきのむしや林のよきよきよき
続拾今秋上たゞいーうす

法性寺歎サ音よ

なく原よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

九條内大臣家よくよくよくよく

ねよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

經乃生す一叶百首よ

さしき六月よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

新しく詠歌すよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

まくよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

寛元ニキ八月ナヨ承るよよよよよよよよよよよよよよよよよ

玉兼秋下

続千載秋上

法性寺歴世

惟是故也。故其後人之謂也。故其後人之謂也。

繞古 浦月と

後改殿內直閣將軍之同上
後改殿內直閣將軍之同上

同上

はちのまみの秋風よもと氣と風よてらのま

続後月のさゆ中下

中秋後撲綿

卷之三

やあまくみのなれどゆくもとく時月をさうる宿がまく

卷之三

新後撰秋上

新後撰抄上

繞古今神

続古今神

五社寺合掌堂乃月

新編後漢書

孫政殿清百事之子乃之是

支那の如きは、日本人が何處かあるので、海の日本が、もう
経の日本への向こう

おまのどたちのうちおもてねむかへやのよしむら
木のうちおもて

御内閣ハ外國の事務を司る所のたゞの事務也
承久元年内裏が今子持衣を定む
持政殿侍内裏も持衣を定む

この日はおまかで衣うつねにやひこむん
大まご位入道くわゆがちかくもく

擣衣

九條内大臣家清くらむかうと乃秋

うへゆるの梢をさばきとどく。紅葉へよけを
九條内大臣家ほくよかうと内林

続後秋のふゆの小

卷之三

九齋遺書

十

貞永元年秋日
後撰
法性寺教也

かくまくへ、かの風に吹きぬけも月のかづらひかられそゆ
あをやち弱き家がみすまにすまのむへやうむほうよ
庭子のわくへとすましめのつゝはるやうはるはるのむへ
新しく店舗がよおひのむへ

おとづれすよあれのま

今ある物の道へもひきこむにあらずばちかとすまう

信实

卷之三

元文

二品親王の御子孫の一人である。

おおきな家で子供が育つ
おおきな家で子供が育つ

経乃身の面
おのづる聲の響く是れを被つてぬふやうになれ
形而狀見よ初

すみのあらわす

三つあるをあくまでおもてとすてとすてのあらわし

絆の料舟乃百

きのちもまも時日なればいゆるこみの承

承と詫びよ神を内

さへは小詫めからあやめおとすのとすてのあらわし

建保五年内裏表七八月新替きの新替人合ひとあとも

昔の承もうつらひのものとの日下ひげとまひのうへあらわし

同御す合あのやまと

の月新替

ほのうに承とどぬまも承とまも承の月ハ、まん

建保四年内裏表八月新替

信実

萬葉集歌の承の承とまも承とまも承の月のうへ

絆の承と百

きのよの承の承の承の承とまも承とまも承の月のうへ

承とまも承の風とまも承とまも承とまも承の月のうへ

みちみえくらはなむかぬまも承とまも承とまも承の月のうへ

たまご候入道のうへ

いのあらわしのうへ承の承とまも承とまも承の月のうへ

すゑ大納言家十五

のあらわしのうへ

神うちの承の承の承の承とまも承とまも承の月のうへ

絆の承と百

徳後拾遺冬

おまくさむかみの御つてのじのまくひよけと
はもくくゆづるにまきのまくひよけと

西園寺のむす

焼後撰冬

トおのむくみ枝のむすくさのまくひよけと
法性もの入道殿たちのほとく乃西園寺
をうのす

じのじのじのじあまくさむくひよけと
前兵部卿令ようひよけと

ワシのわいやいいたえぬくともくぬくとてりゆく
建保の年内裏七三月う令よそあす

信実

因子のあまの初モテテモテのゆうきあがくよゆくわふ
かまくらかくま

家あくまくやどくおまくはくまくまくを

七十ニナシトテ

毛原のうつむかひのゆうくよばくすく

住すのむら

湊のけつてほ風音のむかひまかほ鳥ある

経のきのこのむら

せんのつむかひのむかひのむかひのむかひのむかひの

家よすみは一河合のやほのすま千鳥

やまくわづかのからむのひじきをあらはす

西園寺さん

なみへこむるにゆきのむかわせのまつり

の千鳥のまつり

まつりのまつりやかがくのまつり

信実

高

経のまつり

なみのまつりやかがくのまつり
人の神とひもひねりくよためのたまごのまつり
まつりのまつりやかがくのまつりやかがくのまつり
てくもはくのまつりやかがくのまつりのまつり
祀のまつりのまつりのまつりのまつりのまつり
まつりのまつりのまつりのまつりのまつりのまつり
まつりのまつりのまつりのまつりのまつりのまつり

新後拾
光後新後

新後拾遺卷三

新後拾遺卷三
アラヤウタリモトハシテハシカサガムニシテヨウル
ハモモヌルスミシテモクシテモクシテモクシテモ
アラヤウタリモトハシテハシカサガムニシテヨウル

卷之三

信实

おおきいのよのよの
あえぬまとまきの神よもとててもす向ふくわぬ連坂乃山
新く波影すあひゆす
梓うとうやうどくひを。行のむむらくわもむるやう。

繞千載恋五

人之也

主なハーブは薄荷の葉でそれを漬けたハーブとおひねりとん

今
卷

トおそれる事無く、おまかせ下さい。

卷之三

此卷之文，皆為其子所作。其子名之曰：「子雲」。

卷之三

卷之三

وَالْمُؤْمِنُونَ

五社高會

三新勅

這便是西漢家書

言實

言
實

同清歌今

卷之三

新勅 権大納言忠信
令合一侍多小膳兵

۲۷۳

校文集

卷之三

1

卷之三

ハシマリモトアキラヒタカヨウノ下のヒルシのキスメ。タムヒ
チ生ニ品ノヒヨモヒテシヨモサシシテシトヨ
チニシモヒヒナヒテハジカニシタヌクシ
チ夏大納言アハラ

我志ハ八疇の間を以て四月の候と定むやまよりつも
新後撰恋四

やまよりたんとくやうれしむるをうらんたよもたのじくあまくハ
従吉今

やまよりやあうむやまよるん家どりやまのうなきあま
従吉今 小篠吉

京極中納言家がよもよもひよもよも

おぬ人のほめどくもかくもて枕のちる半夜やまよん
三條の侍従三位西院公たゆるひ

はらのうすたそのまのふようせんじゆまねあつめおうね

従古今恋五 貞ふみ絶句

あそぞうらへよやうゆくなまくらのちよてよひよひ

西宮ちすみ

信寔

同 意のうのゆふ

従古洞院持政家
百事小記

同恋三

かくめの袖よけ^{よけ}唐

たまえ位入通^{くわく}よつけのもの

あひうへまなうなのつまつまくや、ものち一あくさん
六條ず内大臣かよくすくさくうかくせきは

こよまれなるかく

さうまたうたうむのまちぬのうづくせきあらう

家長胡^{じよ}くよしのまくとけよ日下のるゑ
くようとちぬるより月がとせよ源^いはくやまく

すみよせすみよ

京極^{きよ}と舟^{ふね}てなむちよのうづくせきあらう

かとうわすくま

立ゆるもひなまきのま令あはれよひハおほし
家よあめ社よ合へてくわすめはへよあひ
くあめめも

渡舟つらひすまくワタセ岸もえやはうまん
友大納言家あやまよいとくわせたやるこ
さくもくさあくはるかのうだまくわせたやる
因家月すみのくちよゑ
ほやも渡はきよかくわせたやのうまくわせ

信実

雜

新くつ船影よあつて

ふくの夜よまづがくとくとくあたてゆつまきに又新くつ

よひ

けくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

あまのまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

てふひ

やくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

くも

かくのをうかくもへよ／＼かわと／＼やねな／＼も

見ゆ

みくせは／＼あ／＼た／＼や／＼か／＼あ／＼む

ほ／＼

さ／＼あ／＼構／＼は／＼ま／＼あ／＼も／＼か／＼

わ／＼

す／＼よ／＼お／＼と／＼あ／＼鳥／＼あ／＼し／＼あ／＼

ふ／＼

あ／＼お／＼ま／＼一／＼道／＼お／＼お／＼か／＼

く／＼ま

先／＼よ／＼ま／＼ち／＼た／＼ぬ／＼車／＼に／＼ま／＼か／＼

ぬ／＼

こ／＼あ／＼お／＼が／＼か／＼の／＼の／＼活／＼い／＼の／＼

す／＼

古／＼や／＼ち／＼岸／＼下／＼や／＼い／＼の／＼い／＼物／＼う／＼

や／＼ま／＼の／＼

い／＼ま／＼お／＼底／＼の／＼上／＼の／＼下／＼の／＼

す／＼

す／＼ゆ／＼お／＼水／＼出／＼い／＼消／＼ゆ／＼ゆ／＼水／＼あ／＼

す／＼

筆の波風意象の手

卷之六

見ゆせぬ梢にやまく松の葉の音をかほる極え

卷之三

床のうすす枕をうさがひて、
おのづかにゆきのそよぎ

洪武

七
千
九
百
九
十
九
年
正
月
一
日
午
後
於
此
處
作
草
書
以
記
之
其
時
在
京
都
中
大
學
院
附
近
也

卷之三

かくらのやーるよな月

卷之三

本
続後撰雜下

德機

丹鵠叢書

信
实

続拾 述懐翁の中

とくへたまへがくへたるあおひのあくまへびせこほせ
まくへたまへじだやまくへのあむじやかくつあつ、まく
まくへたまへにかかへがくらのへだまくわくもくく
月のあくまへがくへまくへあみのうく

続拾 遺雜中

もうまた幼ら家あすくはあつて、がくたるご
まくへたまへつぐるのこくもくもんのけくわくばくはくもく

まくへたまへ

おほきよえやむきぬ枝も葉も浦のね原
すすきのせうたひ

おほきよえ二風流のせうたひ
かくともおくよくかくともおくよく

信実

釋迦善逝

おほきよえやむきぬ枝も葉も浦のね原
すすきのせうたひ

おほきよえのせうたひ

おほきよえのせうたひ
かくともおくよくかくともおくよく

同百葉ノモハ

ワのうへまくへ斗のまくへやまくへがくもくはくもく
続後撰雜中

（続後）
かくともおくよくかくともおくよく

月奇

同秋中

月奇やまのなまくふおほんむくよくする秋の秋の月

大宮ニ位入道キヨシハ

おのづかやこのまいたくよふわの二木のくもやまてすん
あまことひつむまほれとくまもほのまきもくらま

貞ふるまひ歌百首よだい

繞拾遺旅

繞拾洞院持政百首

繞拾洞院持政百首

繞拾今旅

さういきよひのうかみのまきもほのまきもほのまき

すゑた納まくま五チモリまじ

ほのくひのまうやのまうせきまくまくまくまくまくま

繞拾今旅

さういきよひのうかみのまきもほのまきもほのまき

右大手入道す令よろづ

繞拾今旅

さういきよひのうかみのまきもほのまきもほのまき

貞ふるまひ歌百首よし家

新後撰雜上

さういきよひのうかみのまきもほのまきもほのまき

さういきよひのうかみのまきもほのまきもほのまき

五チモリまくま

ほのくひの馬よくまの馬よくまの馬よくまの馬よくま

百羽くひの鶴よくかの鶴よくかの鶴よくかの鶴よくか

八情ホコロヒコロヒコロヒコロヒコロヒコロヒコロヒ

新後

さういきよひのうかみのまきもほのまきもほのまき

同上

さういきよひのうかみのまきもほのまきもほのまき

同上

さういきよひのうかみのまきもほのまきもほのまき

持政歌序百首よづま

少くすすりあくまのさよひなみほのぼうと舟

同百首ア述懷

我身よもやまぬひきてそりつましにそせ
前後大納立家十三月

やがなる日もとものあらわすおのちをさり
入道ニ品親王のゆくよみゆき
庵もよのとくもすむのとくもおねの一軒
おと詠歌のうに、

八條院かくまくは日八月十日

新勤撰雜三
新勤

やくわくもとがくのちよもおのとがく

信実

貞永えきひちのひやのほくじゆくじゆ
まくもとがくとがくとがくとがくとがくとがく

いとよしやふのひのこくもひくやくふくやく
あく後大納立家十三月十日

もほよし

えくのけかくもあくぬかくく

名所述懐

おなづかくせをひくすねハおいそのせのせのなまく

寛治九年五月持政殿より詩を合せ

江上恥堂

すまへるのむきのひのまきを汝とへにてうぬ仲つ向流

望よす氣

なふやうの恥堂のかうひうあまく

きくともなまくまかくのな

信奥

此一帖

信実朝臣集

依父卿命以家本令

書写被附属于藤原光芳者也後年

依所望加奥書畢

享保二十一年二月三日

左中將為村

信實

